

木精

森鷗外

青空文庫

巖が屏風のように立っている。登山をする人が、始めて深山薄雪草の白い花を見付けて喜ぶのは、この谷間である。フランツはいつもここへ来てハルロオと呼ぶ。麻のようなブロンドな頭を振り立って、どうかしたら羅馬法皇の宮廷へでも生捕られて行きそうな高音でハルロオと呼ぶのである。

呼んでしまつてじいつとして待っている。

暫くすると、大きい鈍いコントロールバスのような声でハルロオと答える。

これが木精である。

フランツはなんにも知らない。ただ暖かい野の朝、雲雀が飛び立って鳴くように、冷たい草叢の夕が忍びやかに鳴く様に、ここへ来てハルロオと呼ぶのである。しかし木精の答えてくれるのが嬉しい。木精に答えて貰うために呼ぶのではない。呼べば答えるのが当り前である。日の明るく照っている処に立っていれば、影が地に落ちる。地に影を落とすために立っているのではない。立っていれば影が差すのが当り前である。そしてその当り前の事が嬉しいのである。

フランツは父が麓の町から始めて小さい沓を買つて来て穿かせてくれた時から、ここへ

来てハルロオと呼ぶ。呼べばいつでも木精の答えないことはない。

フランツは段々大きくなった。そして父の手伝をさせられるようになった。それで久しい間例の岩の前へ来ずにいた。

ある日の朝である。山を一面に包んでいた雪が、いたたき巔にだけ残って方々のもみ櫛の木立が緑の色を現して、深い深い谷川の底を、水がごうごうと鳴って流れる頃の事である。フランツは久ひさしぶり振で例の岩の前に来た。

そして例のようにハルロオと呼んだ。

麻のようなブロンドな頭を振り立って呼んだ。しかし声は少し荒さびを帯びた次高音になっているのである。

呼んでしまつて、じいっとして待っている。

暫くしてもう木精が答える頃だなど思うのに、山はひっそりしてなんにも聞えない。ただ深い深い谷川がごうごうと鳴っているばかりである。

フランツは久しく木精と問答をしなかったので、自分が時間の感じを誤っているかと思つて、また暫くじいっとして待っていた。

木精はやはり答えない。

フランツはじいっとしていつまでもいつまでも待っている。

木精はいつまでもいつまでも答えない。

これまでいつも答えた木精が、どうしても答えないはずはない。もしや木精は答えたのを、自分がどうかして聞かなかつたのではないかと思った。

フランツは前より大きい声をしてハル口才と呼んだ。

そしてまたじいっとして待っている。

もう答えるはずだと思ふ時間が立つ。

山はひっそりしていて、ごうごうという谷川の音がするばかりである。

また前に待った程の時間が立つ。

聞こえるものは谷川の音ばかりである。

これまではフランツはただ不思議だ不思議だと思つていたばかりであつたが、この時になつて急に何とも言えない程心細く寂しくなつた。譬^{たと}えばこれまで自由に動かすことの出来た手足が、ふいと動かなくなつたような感じである。麻痺^{まひ}の感じである。麻痺は一部分の死である。死の息が始めてフランツの項^{うなじ}に触れたのである。フランツは麻のようなブロードな髪が一本一本逆に豎^たつような心持がして、何を見てもなしに、身の周匝^{まわり}を見廻し

た。目に触れる程のものに、何の変つた事もない。目の前には例の岩が屏風の様立っている。日の光がところどころ霧の幕を穿つて、樅の木立を現わしている。風の少しもない日の癖で、霧が忽ち細い雨になつて、今まで見えていた樅の木立がまた隠れる。谷川の音の太い鈍い調子を破つて、どこかで清い鈴の音がする。牝牛の頸に懸けてある鈴であろう。フランツは雨に濡れるのも知らずに、じいつと考えている。余り不思議なので、夢ではないかとも思つて見た。しかしどうも夢ではなさそうである。

暫くしてフランツは何か思い付いたというような風で、「木精は死んだのだ」とつぶやいた。そしてぼんやり自分の住んでいる村の方へ引き返した。

同じ日の夕方であつた。フランツはどうも木精の事が気に掛かつてならないので、また例の岩の処へ出掛けた。

この日丁度午過から極軽い風が吹いて、高い処にも低い処にも団がついていた雲が少しずつ動き出した。そして銀色に光る山の巔が一つ見え二つ見えて来た。フランツが二度目に出掛けた頃には、巔という巔が、藍色に晴れ渡つた空にはつきりと画かれていた。そして断崖になつて、山の骨のむき出されているあたりは、紫を帯びた紅に勻うのである。フランツが例の岩の処に近づくと、忽ち木精の声が賑やかに聞えた。小さい時から聞き

馴れた、大きい、鈍い、コントルバスのような木精の声である。

フランツは「おや、木精だ」と、覚えず耳を敬そはだてた。

そして何を考える隙ひまもなく駈け出した。例の岩の処に子供の集まっているのが見える。子供は七人である。皆ブリュネットな髪をしている。血色の好い丈夫そうな子供である。

フランツはついに見たことのない子供の群れを見て、気兼をして立ち留まった。

子供達は皆じいつとして木精を聞いていたのであるが、木精の声が止んでしまうと、また声を揃えてハルロオと呼んだ。

勇ましい、底力のある声である。

暫くすると木精が答えた。大きい大きい声である。山々に響き谷々に響く。

空に聳そびえている山々の巔は、この時あざやかな紅に染まる。そしてあちこちにある樅の木立は次第に濃くなる。鼠ねずみいろ色ひたに漬されて行く。

七人の知らぬ子供達は皆じいつとして、木精の尻しりこえ声こゑが微かになつて消えてしまうまで聞いている。どの子の顔にも喜びの色が輝いている。その色は生の色である。

群れを離れてやはりじいつとして聞いているフランツが顔にも喜びひらめが閃いた。それは木精の死なないことを知ったからである。

フランスは何と思つてか、そのまま踵きびすを旋めくらして、自分の住んでいる村の方へ帰つた。歩きながらフランスはこんな事を考えた。あの子供達はどこから来たのだろう。麓の方に新しい村が出来て、遠い国から海を渡つて来た人達がそこに住んでいるということだ。あれはおおかたその村の子供達だろう。あれが呼ぶハルロオには木精が答える。自分のハルロオに答えないので、木精が死んだかと思つたのは、間違であつた。木精は死なない。しかしもう自分は呼ぶことは廃よそう。こん度呼んで見たら、答えるかも知れないが、もう廃よそう。

闇やみが次第に低い処から高い処へ昇つて行つて、山々の巔は最後の光を見せて、とうとう闇に包まれてしまった。村の家にちらほら燈火が付き始めた。

(明治四十三年一月)

青空文庫情報

底本：「普請中 青年 森鷗外全集②」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年7月24日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版森鷗外全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～9月刊

入力：鈴木修一

校正：mayu

2001年7月31日公開

2006年4月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木精 森鷗外

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>